一人一人に寄り添った就職支援で学生を支える

都留文科大学（山梨県都留市）キャリア支援センター

教員養成大学としての長い歴史と実績を誇る都留文科大学。教員を志す学生が多かったが、近年は公務員や一般企業への就職を目指す学生が増えている。同学では〝社会人としての常識〟を学ぶツールとして秘書検定を活用している。秘書検定講座とキャリア支援の取り組みについて伺った。

れんが造りの校舎が美しい都留文科大学キャンパス。本部棟前の赤の広場，通称“あかひろ”は学生たちの憩いの場だ

大学と卒業生が一丸となって学生の就職を支援する

都留文科大学は昭和28年に県立の臨時教員養成所として設立され、今年で創立68周年を迎えた伝統校だ。学部は教養学部と文学部の二学部制で、日本全国から学生が集まる。

元々は教員志望の学生が多かったが、平成5年に教員免許の対象外である比較文化学科が開設されてからは、多様な進路を希望する学生が増えた。令和2年度の就職状況は、教員が27％、公務員16％、企業は57％だった。

同学では1年次からキャリア教育をスタート。職業適性や自己分析などのキャリアデザイン・プログラムを通して自己理解を深める。正課のプログラムである「キャリア形成」ではさまざまな分野で活躍中の社会人が講演を行い、学生に社会で働くことに対する意識を高めさせる。2・3年次になると企業説明会やインターンシップなどを通して具体的な進路決定を促し、就職活動が本格化する4年次には模擬試験や対策講座などで希望進路の実現を着実に固めていく。

こうした取り組みの中心となるのがキャリア支援センターだ。教員・公務員・企業の分野ごとに対策講座や面接講座を行う他、それぞれに専門の就職アドバイザーが在籍し指導を行っている。教員専門のアドバイザーには元校長や元指導主事が、公務員には公務員予備校の元講師が、企業には実務経験豊富な企業経験者が着任。学生の志望別にきめ細やかに支援体制を整え、対応している。

「本学のキャリア支援の強みは、縦のつながりです」と話すのは、キャリア支援センターの元職員長坂美和さん。今年の8月までキャリア支援センターに在籍し、学生たちを見守ってきた。

「本学は全国から学生が集まり、その半数以上が地元に戻って就職します。日本中に卒業生のネットワークがあり、特に教員採用試験対策では大きな力を発揮します」（長坂さん）。

教員の同窓会は全国に支部があり、独自に教員採用試験の対策会を開くなど支援に積極的だ。対策会では地域ごとに異なる試験の特徴や採用のポイントをアドバイスしてくれる。また

就業分野にかかわらず、卒業生が登録するキャリアサポーター制度があり、OB・OGとして直接後輩とやりとりし、相談を受けたりアドバイスも行う。

同センターにも多くの卒業生が職員として在籍している。小林泰憲さんは「長年本学に関わっていますが、学生の雰囲気はずいぶん変わりました。かつては気骨があり、リーダーシップを取るタイプが多かったが、今はおとなしい学生がほとんど。そのため学生の力を引き出そうと、就職アドバイザー制度の充実に努めてきました」と話す。

SNSを使った情報発信や就活アプリの導入など、学生の目線に立った支援に力を入れてきたのは、同じく卒業生で主事の佐藤奈智さん。昨年の緊急事態宣言発令時には、佐藤さんら若手職員が中心となりオンライン環境を整備。発令の3日後にはリモートでの就職相談を開始した。「9割の学生が大学付近で一人暮らしをしています。いち早く学生と大学をつなぐことで支えたかったのです」(佐藤さん)。

同センターでは、就職相談を受ける学生に不安な様子や不調が見られた場合、保健センターのカウンセラーにつなぐといった取り組みも行っている。

(左から) キャリア支援センター元職員で学生課課長補佐の長坂美和さん, 現職員で主事の佐藤奈智さん, 小林泰憲さん

同センター主催の「キャリアカフェ」。学食で気軽に就職相談ができる。カラー診断などのミニイベントも好評だ

学生の意識から変えていく

企業就職アドバイザーの山田淳先生は、平成24年に着任。広告関係の会社に30年以上勤めた営業経験を生かし、学生にアドバイスを行う。

「本学の学生は恵まれた環境で学生生活を送る一方、いざ就職活動で都心に出ると都会の学生に気圧され、十分に力を発揮できない傾向があります。それを支えてサポートし、それぞれの本領を発揮できるように導いています」(山田先生)。

個人面談では自己分析や職業適性判断、志望業界別にエントリーシートの書き方や面接時のポイントなどを指導する。「学生は必要以上に自分を低く評価していることが多い。自信を持たせるために、一人一人時間をかけて話を聞いています」(山田先生)。

「以前は本学の教員養成のイメージに、学生自身がとらわれていました」と話すのは、同じく企業就職アドバイザーの碇(いかり)ともみ先生。碇先生はJALの元客室乗務員。同社の新人教育にも携わってきた経験があり、同学にエアライン志望者が増えたことをきっかけに着任した。

「着任当初、学生から『この大学からでもエアラインに就職できるか』と問われて驚きました。まずは学生の意識から変えていこうと考えました」(碇先生)。

平成28年から碇先生が導入した秘書検定も意識改革のための取り組みだ。「社会人に必要な常識や言葉遣いが網羅されているのが秘書

キャリア支援センター企業就職アドバイザーの碇ともみ先生 (左) と山田淳先生。碇先生は秘書検定・サービス接遇検定・ビジネス実務マナー検定の1級に合格している

最新事情 50……都留文科大学 キャリア支援センター

検定。自分の振る舞いに自信がない学生も、秘書検定を学ぶことで自分のやっていることが正しいと胸を張れます。さらに合格できれば確実に自信につながります」と碇先生。全7回の秘書検定対策講座では、碇先生のパフォーマンスを交えた講義が人気だ。自身の豊富な実務経験から、問題に類似する事例が起きた際に実際に行った対応や振る舞いを実演し解説する。

「学習はとにかく楽しくやらないといけないと思っています。合格すればよいのではなく、内容をきちんと理解して実際の場面でアウトプットできるようになってほしいのです」（碇先生）。

また秘書検定は〝上下関係〟を学べることが大きなメリットでもある。上司と部下の立場がはっきりしているため、外部の人と改まった態度や言葉で話す機会が少ない学生たちに、上下関係を伝えるのに有効だという。

「社会に出れば超えてはいけない一線が確実にある。学生のうちに意識できるようになれば、入社後も円滑に業務に取り組めます。また利益に貢献する、自分の能力を表現するなど、企業で働く際の意識も学ぶことができます」（碇先生）。

（左から）教養学部学校教育学科3年生丸橋明依さん，文学部国際教育学科3年生の西村奈々花さん

学びを糧に社会へ羽ばたく

教養学部学校教育学科の丸橋明依さんと文学部国際教育学科の西村奈々花さんは、ともに秘書検定2級に合格した。

友人と一緒に秘書検定を受験したという丸橋さんは「友人と勉強会を開くなど準備を重ねてきましたが、一般知識では思った以上に自分の知らない用語があり、焦りました」と振り返る。西村さんは「車の席次や冠婚葬祭のルールは今回初めて学びました。学生のうちに知ることができてよかったです」と話す。

西村さんは検定を学んでから責任についての意識が変わったという。「これまでは、バイト先で同僚がミスをしても自分には関係がないと思っていました。秘書検定の問題で後輩のミスを自分の責任として謝罪しているのを読んで、何でも自分のこととしてお客さまに声を掛けるようになりました」。

丸橋さんも検定から得た学びを学生生活に生かしている。「女子アイスホッケー部のキャプテンを務めているのですが、コーチと話したり、練習場の予約のために目上の方とメールを交わす機会があります。そのときに自信を持ってきちんとしたメール文を書くことができるようになりました」。

丸橋さんは教員、西村さんは公務員を目指して現在勉強中だ。「教員は子供とともに未来をつくる仕事。教員の職場環境を改善するための取り組みをしていきたい」と丸橋さん。西村さんは「多くの子供がよりよい環境でレベルの高い教育が受けられる世の中にしていきたい。行政の側からできることを模索していくつもりです」。学びを糧に力強く社会へ羽ばたく意志を聞かせてくれた。

全学共通専門科目の「キャリア形成」では，キャリア支援センター在籍の就職アドバイザーも登壇し講義を行う